

交流の夕べ

ベラルーシのお客様を迎えて

お話しする人

ベーラルソーバ さん(小児科医) / エレーナ・グルディノーバ さん(英語教師)
振津かつみ さん(低線量被曝の長期的影響などを研究しているお医者さん)

* 振津先生には、放射能・放射線の人体への影響や劣化ウラン弾の被害のお話しなどをさせていただきます。



4月26日にはチェルノブイリ原発事故20周年を迎えます。史上最悪の原発事故によって、広島原爆の約600発分もの放射能(セシウム137)がばらまかれました。放射能はベラルーシ・ウクライナ・ロシア(被災三国)、ヨーロッパ、そして日本にまでも飛んできました。被災三国だけでも900万人もの人々が新たなヒバクシャとなってしまったのです。

汚染地域(セシウム137で1キュリー/km²以上の汚染地)の面積は、被災三国だけでも日本の面積の約30%に相当します。高汚染地域から移住しなければならなかった人々は40万人にのぼりました。事故から20年を経てもチェルノブイリは決して終わってはいません。今なお650万人もの人々が汚染地域に住み、汚染された食べ物を口にすることを余儀なくされているのです。

豊かな自然、人間だけでなく全ての生物の生きる環境が汚染されたのです。とりわけ放射能の影響を受けやすい子ども達の甲状腺癌の激増をはじめ、人々の健康状態が全体的に悪化しています。汚染地域では、農業などの産業が立ち行かなくなり、国全体の経済困難とあいまって生活は苦しくなるばかりです。そんな中でアルコール依存などの社会問題も深刻化しています。

一方、被災者対策・医療の切り捨てが進み、被災地の抱える問題は山積みです。このような現地の実情にもかかわらず国際原子力機関(IAEA)などは原発推進のために「チェルノブイリの放射能被害はたいしたことはなかった...」との宣伝を強めています。

53基の原発を抱える日本でも、経済性優先のずさんな管理・運転の下で人命が奪われる事故も起こっています。地震の頻発にもかかわらず、耐震設計に問題のある原発が動かされています。日本でもチェルノブイリのような大事故が起こらない保証は全くありません。チェルノブイリ原発事故は日本の私達にも大きな警鐘を鳴らし続けているのです。

繰り返さないでチェルノブイリ！
チェルノブイリ原発事故20周年の集い
ベラルーシの被災地から小児科医と教師を迎えて講演と交流

日時: 4月25日(火)夜7時～9時
場所: 武生商工会館(越前市・バイパス東)
主催: 子どもたちに未来をつなぐ会
入場カンパ 500 円

*** 来日するお二人のプロフィール**



ベーラさん
小児科医



エレナさん
英語教師

来日するお二人が住んでいるベラルーシ共和国モギレフ州のクラスノポリエ地区は、チェルノブイリ原発から 250 km も離れていながら 3 分の 1 以上が高汚染の「居住不能」地区〔セシウム 137 で 15 キュリー / km² 以上の汚染〕となっています。人々の移住、出生率低下などで、地区の人口は事故前の 2 万 3 千人からほぼ半減し、今では 1 万 3 千人です。

地区の病院で小児科医として長年働いているベーラ・ルゾーバさんは、地区の子供たちの健康状態や家庭環境をほとんど全て把握されており、責任感の強さと飾らない人柄で、人々から「クラスノポリエの母」と呼ばれるほど慕われている方です。困難な状況を抱えている家庭を一軒一軒訪問し、健康管理や生活支援の手助けもしてられます。チェルノブイリ事故の前後での人々の健康と生活の違い、現状などを語って下さいます。

エレナ・グルディノーバさんはクラスノポリエで生まれ育ち、今では地区の学校で英語を教えている若い教師です。ベラルーシの学校は 11 年制で、日本でいうと小学校から高校 2 年生までを一つの学校が受け持っていることとなります。学校では、自分たちの地区を襲ったチェルノブイリ原発事故のこと、未だに地区が直面している放射能汚染の問題などを、事故後に生まれた子供たちにも教えてゆきたいと、事故の記念日に作文や絵を描いたりする取り組みなどを行っています。

チェルノブイリ 20 周年にあたり、汚染とヒバクの続く被災地の現状、人々の生活と思いをぜひ多くの日本の皆さんにも知っていただきたいと、「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」が支援・交流を行っているベラルーシの被災地クラスノポリエから、二人の友人（医師と教師）を招きました。チェルノブイリを繰り返さないために、チェルノブイリは何だったのか、今後の支援・交流の課題は何か、皆さんとともに考えたいと思います。どなたも、気兼ねなくお出でかけください。